平成30年７月

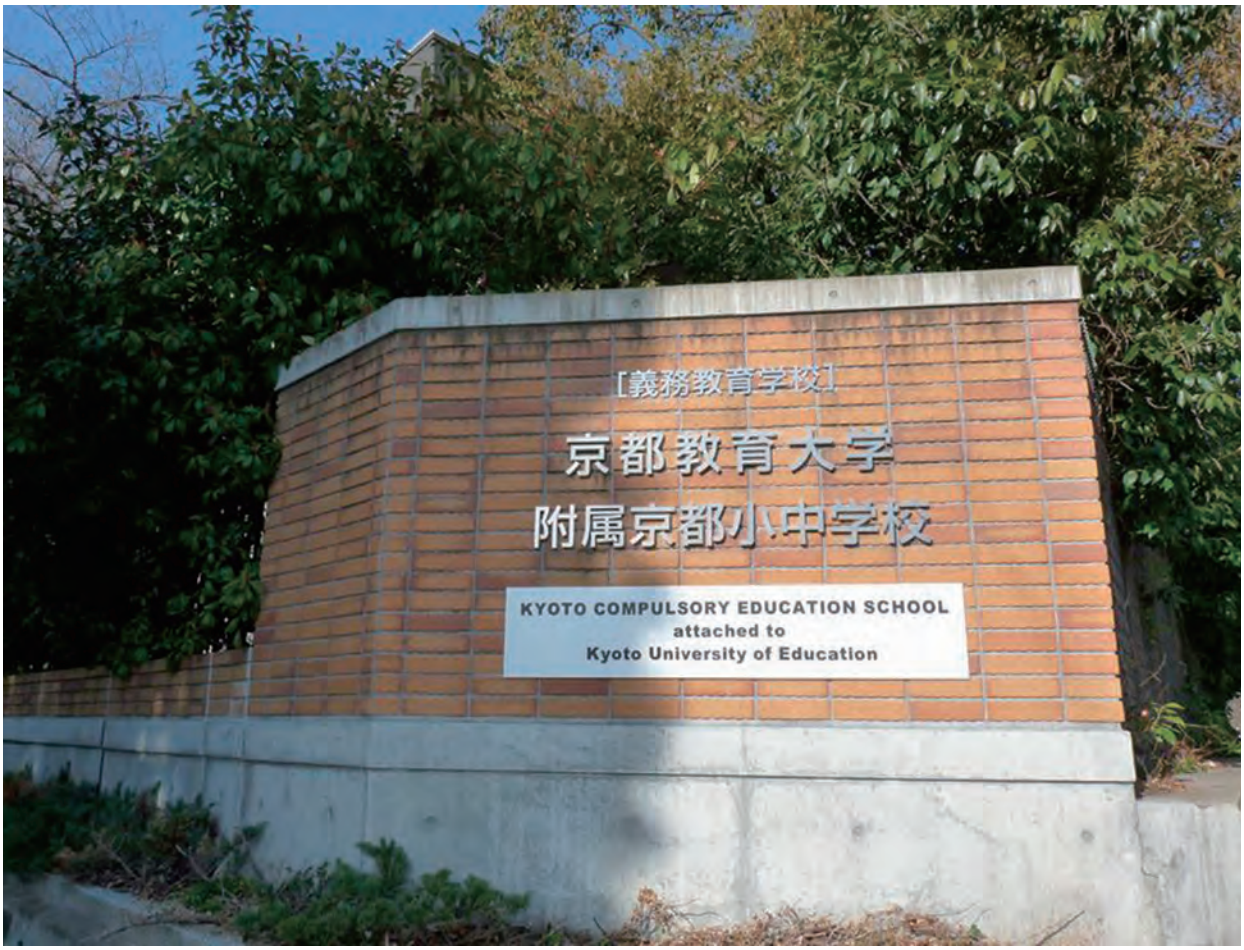
第　５　号

京都教育大学
附属京都小中学校
東櫻同窓会

東櫻だより

〒603-8163
京都市北区小山
南大野町１番地
TEL
(075)431-7131
発行人　堀場　厚会長
題　字　岡田直樹前学校長
印刷中西印刷

――「同窓生のつどい」報告号――



中高等部紫明新町角校名サイン

東櫻同窓会ホームページアドレス http://www.touou-dousoukai.jp/

ご挨拶

同窓会長　堀場　厚

東櫻同窓会の会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申しあげます。

さて、今年に入っての明るい話題は平昌オリンピックの日本選手の活躍でした。スケートやカーリングなどの競技に見入った方も多かったでしょう。

今回の好成績は選手の努力はもちろん、国を挙げての強化策が功を奏したことも貢献しているそうです。早くから日本代表を招集してチームとして練習させ、加えて計画的で科学的なトレーニングを行って基礎体力を強化したことが効果を発揮し、あの好成績につながったということです。

教育の現場を振り返っても、今最も求められているのは確固とした基礎学力に裏打ちされた、新しい発想を生み出す力ではないでしょうか。独創的なアイデアをもたらすには流行に流されることなく基本を大切にしながらも高い目標を掲げ、そのイメージを明確に描けることが重要です。基礎学力を強化することによって新しい時代を切り拓く人財を育てることができると感じています。

最近、大学を中心として教育の現場から講演の依頼を多くいただきます。皆さんにお話をすると学生さんの反応がとてもポジティブで元気づけられますが、本当に大事なのは基礎学力をつける小中学校での教育ではないかと思うこともあります。

その意味で、小中九年間の一貫教育を提供する京都教育大学附属京都小中学校においての教育によって、次世代のリーダーとなる人財が育まれることを心から期待しています。同窓会会員の皆様には今後も附属京都小中学校を温かく見守っていただき、尚一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

ご挨拶

学校長　谷口　匡

このたび、岡田直樹前校長の後をうけて、学校長に就任しました。大学では国文学科に所属し、漢文学を専門にしておりますので、少しそれに因んだことを申し上げてご挨拶に代えたいと思います。

去る三月に大学時代の恩師を招いての同期会が東京であり、出席してきました。東京在住の者を中心に、北は秋田、西は大阪、さらには国外からも参加がありました。私にとっては二十数年ぶりのことだったのですが、その時間と空間の隔たりは一瞬で吹き飛び、実に楽しい一時でした。「朋（とも）あり遠方より来たる、亦た楽しからずや」という有名な『論語』の言葉がありますが、この楽しさはまさにこれだなと実感したのです。

やや専門的な話になりますが、この「朋」とは古い注釈に「同門」のことであると書かれております。「同門」とは同じ師に学んだ人、つまり同じ学校の同じ教室で勉強した友人、要するに同窓生のことです。ただの遊び仲間ではない、こうした「朋」が遠くからはるばる集まってくると、それはなんと楽しいことか、ということです。

これはなぜでしょうか。ある時期に同じ空間でともに学び、遊ぶという経験がそうさせるのでしょうか。ともあれその楽しみは古く、孔子の時代から言われていたという事実は、実に興味深いことではないでしょうか。

同窓会が卒業生にとって楽しく意義深い空間であるためには、まずは在学生にとっての学校がそうでなくてはなりません。そのためにできることがあれば、微力し尽くしたいと存じます。

東櫻同窓会の皆様におかれましては今後とも本校の教育活動にご支援をたまわりますよう、よろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

同窓会副会長　大倉　治彦

東櫻同窓会の会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃は同窓会活動と母校の教育活動に、ご支援ご協力を賜り誠に有難うございます。

早いもので小中の同窓会が一つになって七年になります。昨年は六月に「同窓生のつどい」が盛大に行われ、会としての一体感がさらに高まったと思います。「つどい」の企画・運営に携わられた幹事の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

また、昨年は紫FCの創立五十周年にあたり、祝賀会が行われました。私は紫FCの三期生で設立時には四年生でしたが、紫が活動を開始した当初を知っている立場として、五十周年を迎えたことは大変感慨深いものがあります。

それにしても最近のスポーツ熱の広がりには、目を見張るものがあります。特に女性のスポーツが隆盛で、私が学生の頃には女性でスポーツをする人は極めてまれだったことを考えると、隔世の感があります。今では紫FCにも女子の選手がいると聞いていますが、我々の頃には考えられないことでした。二月に行われた京都マラソンには一万五千人の定員に対し六万人以上の応募があり、約二割が女性だと言われています。そもそも私の子供の頃には、女性にマラソンという競技はなかったのです。

男女を問わずまた年齢を問わず、今後もあらゆるスポーツが盛んになっていくと思います。スポーツは単に楽しむだけでもよいのですが、人格形成の手段としても有効です。附属においても、スポーツを通じて心身を鍛える子供達が増えていくことを期待したいと思います。

ご挨拶

同窓会副会長　鈴木　順也

リンダ・グラットンとアンドリュー・スコットが著した「ライフ・シフト：百年時代の人生戦略」（二〇一六年）が話題になって久しい。彼らによれば、神現社会は長寿化の進行により、百年以上生きる時代に入っている。例えば、国連の推計によると、二〇五〇年までに日本の百歳以上人口は百万人を突破する見込みである。さらに二〇〇七年に日本で生まれた子供の半分は百七年以上生きることが予想されるという。私たちは多かれ少なかれ、百年ライフを過ごす覚悟が必要というわけだ。覚悟と書いたのは、著者によれば、長く生きるということは、教育～仕事～引退という人生のステージのうち、仕事の期間が長くなることを意味するからである。引退後も生活の水準を極端に落とさないためには、一般的な定年退職の年齢を過ぎても長く働き続けなくてはならない。一方で、時代は変化し続けるので、若い時に習得した仕事スキルが時代遅れになっていき、通用しなくなる。そこで、私たちは古い生き方と仕事の仕方に固執することなく、人生を通じて変身し続ける覚悟が必要になると著者は警鐘を鳴らしている。

さて、ここからが本題。人生が長くなると、人生の途中で変身を遂げる必要があるが、そのためには自分とは異なった経験をしてきた人々との出会い、すなわち人的ネットワークを広げることが重要という。著者の言葉を借りれば、自分とは違うロールモデルを見つけて学ぶことだ。東櫻同窓会は、附属小中という共通軸のもと、実に多様な人々が集まる組織である。同窓会の総会では世代を超えて同窓生が集まる。学年ごとの同窓会では仕事や経験のバラエティに驚く。仲間が集まると、多くの場合は懐かしい昔話に花が咲く。百年ライフを生きる私たちは、時には未来志向でも互いに刺激しあう仲間であれば、同窓会の価値は一層高まるのではないか。

附属京都小中学校「同窓生のつどい」のご報告

実行委員長　梯　大輔

平成二九年六月二四日（土）午後五時一五分から京都ホテルオークラ・暁雲の間にて三年に一度の「同窓生のつどい」を無事に開催することができました。当日出席いただきましたご来賓や恩師各位をはじめ、OBの皆さまのおかげをもちまして盛会となったこと心より御礼申し上げます。

今回は小学昭和六二年卒、六三年卒、平成元年卒。そして中学四二期、四三期、四四期の三学年で実行委員会を務めさせていただきましたが、ほとんどのメンバーが「東櫻同窓生のつどい」に参加経験してないなかでの企画運営だったため、至らぬ点がありましたことご容赦ください。しかしながらも今回のつどいを無事に終えることができました。これは決して私たち幹事学年だけで成し遂げられたのではなく、理事会をはじめ前回の幹事学年も含めた諸先輩方の多大なるお力添えのおかげだと感謝しております。周知や動員につきましても、皆さま方が前日ギリギリまで同級生等にお声がけいただいたおかげで、全出席者数は二二二名となり、会場の盛り上がりに繋がり、いい時間ができたと思います。

さて、今回のつどいでは、決して長くはない限られた時間の中で皆さまがスムーズに交流ができ、この短時間で満喫していただく。そして、我々、実行委員会の独自性を少し出す。そのために、

1　恩師をきちんと紹介する。
2　歓談の時間を大切にする。
3　東櫻だよりと同窓生のつどいを連動させる。

以上、三つのテーマを軸に設えました。

まずオープニングの恩師紹介では、会場の皆さまに恩師のお顔がわかるよう、スクリーンを駆使しながら一人一人紹介しました。小学校恩師は七名（渡辺武野先生、迫田恒夫先生、清水弘先生、花坂雅夫先生、西村博先生、岸田蘭子先生、星尾尚志先生）。中学校恩師は一二名（千歳京造先生、岡成子先生、山川信晃先生、大嶋正志先生、小寺慶昭先生、竹中宏文先生、山中隆先生、高乗秀明先生、岩崎正美先生、橋本雅子先生、森恭子先生、河原雅人先生）が来てくださいました。

次に同窓会の役員を代表して、堀場厚東櫻同窓会会長（小昭三六年卒・中一六期卒）よりご挨拶いただき、さらに京都教育大学、細川友秀学長より祝辞を賜りました。その後の鏡開きは、細川友秀大学学長、岡田直樹小中学校長、堀場厚東櫻同窓会会長、大倉治彦東櫻同窓会副会長といった学校関係者ならびに同窓会関係者でおこない、乾杯のご発声は、岡田直樹小中学校長より賜りました。

歓談後半には、ピアニストのハタヤテツヤ君（小昭六三年卒・中四三期卒）ご協力のもと、食事や歓談に贅沢なひとときを与えるライブ演奏をしていただきました。カジュアルなスタイルで二〇分ほどの演奏時間でしたが、素晴らしい演奏とは時間を感じさせないもので、あっという間に時が過ぎ、会場はさらに盛り上がりを見せておりました。

その流れに乗り、続いては直前に発刊されました「東櫻だより」の特集ページの企画「附属の謎に迫る」を発表させていただきました。附属で経験した特別な行事や、校内の謎について、私達の目線で、過去から現在を振り返り、我々卒業生が誇りに持っている『附属らしさ』に迫るといった内容でした。ただ、この企画のなかで解決出来なかった謎や、不明確な過去の行事などもありましたので、実行委員の青松竜好君（小昭六二年卒・中四二期卒）が中心となり、会場の皆さんの記憶をもとに解決いただきました。共通テーマを持つことにより、年代を超えた一体感と

いうものが少しではありますが、感じられた良い時間だったと思います。

そして、恒例の福引きをおこない、最後にハタヤテツヤ君のピアノ伴奏による校歌斉唱を出席者全員でしました。一味違う伴奏ながらも懐かしさを存分に感じられたようで、感動で涙を流されてる卒業生もおられました。そんな様々な余韻に浸る間もなく、「同窓生のつどい」は大盛況のうちに散会となりました。

今回、幹事学年として「東櫻だより」と「同窓生のつどい」を担当させていただきましたが、今まで繋がりのなかった様々な方々が惜しみなく、力添えをしていただいたこと、とても感謝しております。そして、経験値の少なさなどからご迷惑も多々おかけしました

こと、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。ただ、こうして「実行委員会」という貴重な経験をさせていただいたおかげで、新たな繋がりや気づきができたように思います。「実行委員会ロス」などという嬉しいような寂しいような言葉も耳にします。こうしたすべてのことの原点となるのは、やはり「附属」という学校に通っていたからではないでしょうか。今後も「附属」という素晴らしい繋がりを感じることの出来る場所（同窓生のつどい）を大切にしていくためにも、先輩方からいただいたものと私たちが経験したことを次回の幹事学年以降に脈々と継いでいけるよう力添えをしていきたいと思います。

次回「同窓生のつどい」がさらに盛会となることを祈念し、報告とさせていただきます。

最後に福引きの景品をご提供いただきました方々をご紹介いたします。

1　月桂冠
上撰（鏡開き用）二樽
大倉治彦様（中昭四九年卒）

2　大倉　博様（中昭五七年卒）
大極殿
和菓子詰め合わせ　三名様
芝田朋子様（中平四年卒）

3　山田松香木店
香飾り　三名様
山田洋平様（中平四年卒）

4　結いごろも
五嶋紐バック　一名様
八木智子様（中平四年卒）

5　DIAN LEE JAPAN
今治タオルギフト　五名様
八木智子様（中平四年卒）

6　菊水ガーデン
観葉植物　三名様
片岡大輔様（中平三年卒）

7　ふるさとの歌がきこえる
（CD付ブック）　二名様
片岡礼奈様（中平三年卒）

8　ルシュルシュル厳選
赤・白ワイン　各一名様
土橋　陽様（中平三年卒）

9　サイン入扇子　一名様
茂山　茂様（中平三年卒）

10　サイン入手ぬぐい　一名様
茂山　茂様（中平三年卒）

11　酒器　三名様
小倉健吾様（中平三年卒）

12　錦一葉
抹茶ポップコーン　四名様
梯　大輔様（中平二年卒）

13　八ツ橋　四名様
木村安之様（中平二年卒）

14　そば処　田毎
日本酒　二名様
堀部智久様（中平二年卒）

15　ディナーバイキング
ペアチケット　一名様
京都ホテルオークラ様

※スペースの都合上、最終卒業年度のみ記載。

母校の「義務教育学校」への移行

総務企画担当副校長　垂井　由博

東櫻同窓会会員の皆様方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は本校教育活動に多大なるご支援を賜り誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

さて、本校は、ご承知のとおり、昨年度、二〇一七年四月一日より小・中学校を融合した新しい学校種である「義務教育学校」へ移行しました。これは、十五年に渡り本校が全国のフロントランナーとして取り組んできた小中一貫教育システムの研究成果によるものであり、国立大学法人附属学校としては全国初の「義務教育学校」となります。東櫻同窓会の皆様方におかれましては母校の姿が大きく変わったように思われるかもしれませんが、変わったのは教育の中身であり、小・中学校の校舎の姿はほぼ従前の面影のままです。

我が国では、少子化や今後の人口減少予測の中で、この後三十年間に全国規模で小・中学校の学校統合や廃校がすすんでいくと考えられます。一方で「中一ギャップ」という文言に象徴されるように、小・中学校間の教育システムや文化の格差が拡大する中で、義務教育制度そのものの見直しも迫られていると考えています。小中一貫教育学校や義務教育学校は、現代の姿を反映した、これからの時代に求められる新しい学校の姿なのです。

振り返ってみると、我が国において「学校」という制度が確立されてからの歴史はそう長くはありません。国が「学校」制度を確立したのは、一八七二年（学制公布）のことです。僅かに一四六年前なのです。本校の前身である「京都府師範学校附属小学校」が創立されたのは、学制公布の十年後、一八八二年ですから、本校は全国的にも非常に歴史の古い学校ということになります。

その後、一八八六年になってようやく「義務教育」という文言が現れ（小学校令）、年齢主義・課程主義併用型の原則四か年の義務教育制度（尋常小学校）が我が国においてスタートします。以降、様々な変遷を経ながら、現在の六―三制の義務教育制度が確立され、義務教育としての「小学校」・新制「中学校」が誕生するのは、戦後の学制改革、一九四七年を待たねばなりません。

我が国において、学校制度の短い歴史の中で、制度や学校種については、まだまだ模索段階であると考えています。六―三制義務教育制度確立以来、その有効性の確かな検証もなされないまま七十年が経過した今、次世代を見据えた新しい学校システムが求められているのです。「義務教育学校」は、今後、我が国の新しい義務教育の在り方を開拓しつつ、次代を担う子どもたちの教育を支えるシステムであると確信しています。本校はこの分野で今後も全国のフロントランナーとしての役割を果たして参ります。東櫻同窓会会員の皆様方の変わらぬご理解ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

中高等部生徒憩いの場
（平成27・28年度卒業生寄贈品）

初等部紫明通側校名板
（平成29年度卒業生寄贈品）

『初等部校舎の今』

教学研究担当副校長　小原　武

東櫻同窓会会員の皆様方におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。また、平素より本校教育活動に多大なるご理解とご支援を賜りまして厚く御礼申し上げます。

皆様ご承知の通り、本校は小中九年間の一貫教育を進めており、平成二九年四月より「義務教育学校」となりました。従来の「小学校」「中学校」という枠を超え、初等部、中等部、高等部という四―三―二制に基づいた九年間を子どもたちは過ごしていきます。

三月一五日、義務教育学校となって初めての卒業式が本校講堂において行われました。九年生の卒業式には、初等部の教職員も含め、全教職員が出席することになっています。九年間で大きく成長した子どもたちは本当に逞しく、式でも立派な姿を見せてくれました。九年間をともに過ごした卒業生たちの絆は、私たちの想像以上に固いものがあるようで、例えば、式終了後、一年生の時の副担任の先生が来られているのを見つけるとすぐに「一年は組集合！」と声を掛け合い、副担任の先生を囲んで「元一は」のメンバーで集合写真を撮っていました。これまで卒業された先輩方と同様、彼らもこれからずっと深い友情で結ばれていくことと思います。

さて、初等部の校舎は、平成二九年度の秋から冬にかけて、外壁の一部補修工事を行いました。外壁に使われているタイルが所々浮いてきて落下の危険性があるということで、今回は、本館東校舎の南半分の一階から三階までを点検、補修しました。合わせて、外側の出窓部分も補修が必要ということで危険がないよう工事してもらうことになりました。壁面のタイルは、当初と同じものはさすがにもう手に入らないので（海外から輸入されたものだったそうですが）、なるべく似たものを見つけてもらいました。工事期間中は、大がかりな足場が組まれ、出入口や子どもたちの遊び場所がやや不便でしたが、二月には無事に終了しました。本館東校舎の北半分と北校舎の方は、今後、予算が付き次第、同じように補修を進めて行く予定です。

このような形で外壁の方は少しずつ補修していく予定ですが、初等部校舎の内側は、これまでに、耐震補強工事も終了しており、エアコンも全館完備されています。以前、私が学級担任だった頃は、まだエアコンはなく、祭りで使うような特大の団扇を買ってきて、暑い日は汗だくの子どもたちを扇ぎながら勉強していたことを思い出します。耐震補強の方は、本館東校舎と北校舎の一階、二階の各教室、特別教室等に入っています。普通教室の補強材は赤色で塗られておりなかなか明るい印象です。

また、卒業生の方々の中には、六年生の教室だけが他の教室に比

べて少し広かったという記憶をお持ちの方も多いのではないでしょうか。六年生の教室は廊下の突き当たりに位置していて、その廊下の分、他よりも広かったのですが、現在は、非常階段への通路を確保するために、広かった部分は廊下となり、その先に非常階段の出入口があります。

その他、小中一貫四―三―二制への移行に伴い、五・六年生教室は中高等部（東エリア）に、中学校校舎にあった図書室は、初等部（西エリア）の特別支援学級棟に移りました。そのため、に組の教室は以前の場所ではなく、現在はプレイルームも含め、北校舎一階フロアに位置しています。

このような形で、附属京都小中学校は、これまでの長い伝統を大切にしながらも、時代に即した新しい取組を進め、よりよい学校作りを目指しています。

東櫻同窓会の皆様方には、今後とも、様々な場所から、附属京都小中学校の子どもたちを温かく見守っていただければと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

◇恩師点描

市川郁子先生

昭和五五年四月から平成二年三月までの十年間附属京都小学校で勤務させていただきました。私は、京都小学校での教科研究において、子どもに焦点を当てた授業構築、自ら学ぶ力を育てることの重要性を学ぶことができました。この学びはその後、京都市立小学校、京都市教育委員会で仕事をしていく上での土台となりました。

平成二一年三月に京都市立東山小学校校長を最後に小学校現場を退き、翌月四月から大谷大学に籍を移しました。教育学部教育学科で小学校教員を目指す学生さんたちを指導しています。その学生さんたちに「なぜ教師になりたいのか。」と尋ねると、多くの人が自分が子どもの頃に出会った先生方のすばらしさや優しく寄り添ってくださった思い出を挙げます。子どもにとって教師という存在は、憧れであり、なりたい大人像であると感じます。教師になりたての新米であった私は、附属京都小学校で出会った多くの子どもたちにとって、そういう存在であっただろうか、と考えてしまいます。

今、大学で指導している学生さんたちが将来教師として、堂々と子どもたちの前に立ち、子どもや保護者の皆様から信頼され、憧れを抱いてもらえる存在となれるよう、微力ながら力を尽くしたいと考えながら日々を過ごしています。

（昭和五五年度～平成元年度在籍）

岸田蘭子先生

私は新規採用から一五年間、附属で教員を務め、京都市に転出し、現在は、京都市立高倉小学校で校長を務めています。附属では教員としての基礎を培ってもらいました。子どもたちとの多様な経験、とりわけ自然と向き合う体験学習は、後の環境の変化にも対応できる力となったと思います。また、教育実習の経験や研究活動を中心とした日々の教員生活では、授業を見る眼を養ってもらいました。実践研究の妙味も味わいました。そして、附属で教えた子どもたちが立派に成長し、親世代となってまた再会したときに、教育のもつ大きな意味を教えてくれたように思います。京都という舞台で繰り返される「人を育てる」ことの意味を東櫻同窓会は見守り、歴史を築いて来られたことを実感しております。この

度、拙著「小学校ではもう遅い」（ＰＨＰ研究所）を上梓いたしました。その原点は附属からスタートしたときから育んできた教育観が、いろいろな人のご理解やご支援により確信できたからこそ、出せた本だと思っています。関心を寄せていただければ幸甚です。何年経っても、色褪せることなく、蘇ってくるような楽しい教員生活の日々を送らせてもらった附属京都小学校時代の子どもたち、保護者の方々、同僚同人の先生方に感謝、感謝です。

（昭和五八年度～平成九年度在籍）

桂　康彦先生

附属の思い出。それはキンモクセイの香り、それは自由な校風、それは厳しさ。

附属京都小学校に勤めさせていただいた平成二年度からの九年間で、教師としての様々な経験をさせていただきました。

とりわけ思い出に残っているのが宿泊行事です。三泊四日の臨海学舎に加えて当時は野外活動があり滋賀県の坊村キャンプ場に行っていました。しかもほぼ自炊生活と言ってもよい二泊三日で着任早々、そのワイルドさに驚かされました。上手に食事が作れないとそのグループは食べ物がないといった状況でした。夏休みに入ってすぐに「山」そして数日空けて「海」と自然を満喫するハードな宿泊行事でした。

さらには北山を巡る遠足もその距離やルートは厳しいものでした。保護者からも「附属の遠足は雨でも行く」と言われたように少しの雨でも厭わず、自然の厳しさに立ち向かっていくかのような遠足でした。

いずれも子どもたちの成長につながる確固としたねらいをもって綿密に計画された行事でした。そして、教師としても人間としても未熟な私を育ててくれた行事であり附属でした。附属の思い出は楽しいことばかりです。皆様、本当にありがとうございました。

（平成二年度～平成十年度在籍）

ビートルズ

村上　一男

ビートルズがあまり好きではありませんでした。

附属京都中学校で五年間、下校時に流れた曲で慣らされました。

四二期～四五期の時代です。

盾行事

水泳大会では何度もプールに落とされ、合唱コンクールでは真剣さに驚かされ、体育大会では走らされ、球技大会では胴上げされました。

三大行事、今でもありますか？

最も印象に残っているのは浜詰での大遠泳。

今、思えばとんでもない行事。

最終日に三キロ（四キロだったかな）も泳ぐ。

そんな距離、泳いだことない。

（私の話です。足、つった）

それでも泳げた（私の話）

人間やればできる。

みんなのおかげです。本当に素敵な中学生でした。

四二期～四五期のみんなは今、何歳になりましたか。

元気ですか

結婚しましたか

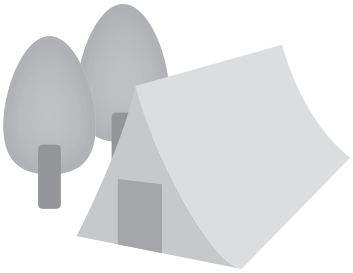
子供いますか

仕事、頑張ってますか

聞いていますか

ＨＥＹ　ＪＵＤＥ

（昭和六三年度～平成四年度在籍）



同窓生点描

◆小平2年卒・中45期卒
津田佐代子

私にとって、人生の大きなターニングポイントは中学一年生の時でした。入学後すぐに訪れた器楽部の体験入部で、美しく優雅な音色に魅せられ、まるで見えない力に導かれるかのようにフルートとの運命的な出逢いを果たしました。

もともと幼い頃から音楽が好きで、ピアノを習ったり、小学校でも合唱部に入ったりしていましたが、まさか自分自身が音楽の道に進むとは全く想像もしていませんでした。しかし、その日から毎日フルートの事で頭がいっぱいになり、次第にフルート奏者になりたいとの夢を抱きました。悩みに悩んで本格的に学ぶ意志を固め、音楽高校、音楽大学への進学を志すようになりました。

とは言え、何もわからない世界に飛び込んでからの中学生活は一変し、朝から晩まで寝る間を削って練習に明け暮れる日々となり、学校行事や勉強との両立も大変で必死にもがいていました。周りの先生方や先輩方、友人達には色々とご迷惑やご心配をおかけしましたが、今でも多大なる協力や応援をして頂き本当に感謝してます。

その後、多数のコンクールにて入賞、入選、海外留学など研鑽を積みながら京都市立堀川高等学校音楽科（現・京都市立京都堀川音楽高等学校）を経て京都市立芸術大学音楽学部を卒業し、フルート奏者として国内外にて演奏活動を始め、またTV、ラジオ、雑誌などのメディアなどにも出演させて頂くようになりました。

最近では新たな試みとして、和服を着てのフルート演奏に加え、京都の神社仏閣を舞台に日本を代表する狂言師、華道家元の方々との競演や、琴など和楽器とのコラボレーションも実施しています。

多くの方々にクラシック音楽へ関心を持っていただくのと同時に、西洋の音楽と千年の都が育んできた伝統文化との融合により「京都らしい」芸術の創造につながればと取り組んでおります。また、地球温暖化防止に向けて、京都議定書採択の地である京都市から「DoYou Kyoto?」ネットワーク大使を拝命し、京都生まれ京都育ちの京女として、京都からの文化、芸術の発信に微力ながら貢献できればと思っています。

◆小平3年卒・中46期卒
浜中　悠樹

私は、Webサイト制作を中心としたクリエイティブ業務と写真作家としての活動を現在行っています。

クリエイティブ業務は、Webサイト制作会社に所属し、デザイナー・ディレクターを経て、プロジェクトマネージャー・プランナーとしての活動となります。

業務内容としましては、様々な企業や行政のプロジェクトをPRする最適なWebサイトのご提案に始まり、企画立案からWebサイトの構成設計、アートディレクションなどの制作進行といったプロジェクトマネジメントやWebサイトの運用におけるコンサルティングを行っています。

近年は、自己目標として、地域活性への貢献をかかげており、京都の文化力を広報するプロジェクトのマネジメントや大阪の堺市の観光情報を発信するWebサイトのマネジメントを担当させていただいております。

京都の伝統工芸に携わられる方々の活動の広報や様々なイベント情報の発信のお手伝いをさせていただく機会においては、京都教育大学教育学部附属京都小中学校

の卒業生の方とも接点が生まれる場面もあり、〝京都教育大学教育学部附属京都小中学校の絆〟を感じることが増えてきて、嬉しく思います。

もう一方の写真表現を主体としたアート作品の創作を行う写真作家の活動は、二〇一一年より開始しました。

京都市内の樹々を被写体とし、日本人ならではの侘び寂びの感性を表現に取り込むことを意識した作品シリーズである「樹々万葉」は、二〇一二年に写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的に一九九一年にスタートしたキヤノン社が主催する文化支援プロジェクト「写真新世紀」にて、審査員である写真家HIROMIX氏に評価いただき優秀賞を受賞しました。

その後、現在に至るまで、個展・企画展・海外でのアートフェアにおいて作品を発表、販売といった活動を行いつつ、国際コンペディション中心に入選・受賞を多数いただくなど、海外へのPR活動を行ってきました。近年は、伝統工芸作家（陶芸・漆芸・日本画等々）と京町家やお寺にて室礼をテーマにコラボ展示などを行い、伝統工芸作品に用いられる表現を学びつつ、日本人の美意識を考慮した写真表現の可能性探求および作品創作を通し感じてきた、人と自然との共存共栄を主題とした文化の探求や発信を行っています。

◆小平4年卒・中47期卒

滝西　敦子

人生の転機。私のそれは京都大学博士課程の時に参加した国立台湾大学開催による両学の企業分析研究会でした。そこで台湾の学生の聡明さ、活発さ、親しみやすさを感じ、台湾に興味を持ちました。その後台湾大学の研究環境が充実していることを知り、一度台湾大学の教員を経験したいと思うようになりました。

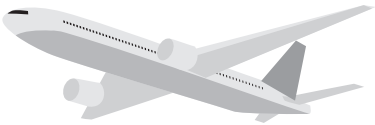
同志社大学と京都大学で会計学などの講義を担当した後、機会を得て台湾大学に行くことになりました。国際会計や企業分析などを担当してきましたが、留学生が多く国際色豊かなことにびっくりするクラスもありました。

台湾大学は私の着任中に二回京都大学と共同で学会を開催しました。その折私は司会を担当させていただき、両学の交流にささやかながら貢献できたことは楽しい体験でした。

そして現在台湾大学の協力を得て、アメリカのノースカロライナ大学で二〇一八年七月までの一年間研究に専念しています。

台湾の多くの受講生がドラマや映画などを通して日本の生活や文化に興味があり、学校教育や行事に話題が及ぶこともよくあります。附属京都小中学校では「裸足の生活」「能力遠足」などユニークで意義深い行事がたくさんありましたが、その中でも思い出深いのは鴨川沿いを走るマラソンです。大勢の父兄や先生の応援の中、美しい景観の鴨川河川敷を最後まで走り終えた時の誇らしく充足感に満ちた瞬間を今もよく覚えています。

海外生活が六年目となり、海外の目線から日本を見ることが増えました。生まれ育った京都は建都千二百年という歴史性と町並み、山並みの美しさが相まって国内外からの評価が高く、台湾の知人からも京都を賛美する声をよくいただきます。そういう時、ほんわかと嬉しい気持ちになります。小中学校で過ごした日々は幾多の記憶として、しばしばその断片が甦ります。これらの記憶はそれぞれが小さくも大切な私の財産だと思っています。



◆年次だより

■小昭21年卒

昭和二一年六年修了を記念して、平成二九年の同級会は、六月二一日に行いました。

我々の附属時代は、正に戦時中。二年生の時、真珠湾攻撃。六年生で終戦。集団登校、学童疎開、科学学級の設置もありました。学校名自体も「国民学校」でした。

我々の学年は、天皇陛下と同い年。これを「高貴皇齢者」と呼んでいるのですが、全般的に老化進行中。怪我、入院、歩行困難、そして死去などの理由で、同級会欠席も年々増えるのは悲しいかな事実ですが、今回はこんなことが現実に起こってしまいました。

昨年の集会は八月、その幹事荒木長男君、一二月に他界。それに、本年の幹事武田昭龍君、開会目前の五月に逝去。他にも訃報あり。

そんな中、まずまず元気な二三名が顔を見せた本年の集会は、まず黙祷から開会。色々とおしゃべりも進むなかで、やはり故人を偲ぶ想い出語りが多かったのです。

（二〇一七年幹事：只木良也・西千代子・五十嵐美嘉子）

■中1期卒

私は現在八四才です。膝痛、腰痛以外、特に大きな病気はなく毎日ジムで運動をしています。

昭和ひとけた生まれの私たちは戦後の混乱期に中学時代を過ごしたことになり、毎日お腹をすかせて通学していたことを思い出します。

私たちには大切にしていることがあります。それは同窓会です。卒業以来一～三年ごとに開き、もうすでに六〇回を越えました。高校、大学時代から社会人になっても続けてこられたのは私たちの誇りであり、自慢のひとつです。縁あって同じ年令の集まりがこのように永く続いてきたのは、戦後の辛く苦しい時代を共に生き抜いてきた者同志がもつ心の絆があったからではないでしょうか。残念乍ら、近年の同窓会ではひとりまたひとりと欠けていって、三五人いた友も今は一〇人ほどになりました。寂しい限りですが、これも世の常、生ある限り大切にしていきたいと思います。

（藤原　孝）

■小昭22年卒・中2期卒

いぬい会だより

京都師範学校附属国民学校（現小学校）を昭和二二年に、京都学芸大学附属中学校を昭和二五年に卒業した私たちは、生まれ年の干支の戊と亥から「いぬい会」と名付けた同窓会を二～三年に一度開催しています。現在の案内発送名簿数は七六名、住所不明他数は八名、物故者数は三五名です。会員年令が八十才半ば近くなり、且つ首都圏など遠方からの参加者を考慮して、最近は京都駅周辺のホテルを会場としています。昨年は三年振りの開催で果たして何人集まるかを危惧していましたが、三年前と同数の二三名が集い大いに盛り上がった楽しい会になり、これならまだまだ続けられると気を強くしました。次回は絹川定君が主幹事で楽しい会を企画中の様です。お互いに体をいたわり、でも気持ちを若くもって元気な再会を楽しみにしています。

（西村宗也）

■小昭23年卒・中3期卒 ――

恒例の学年会『附三会』は平成二九年はお休みでした。八三才を迎える私達、附属時代の身体能力、学業の優劣、身長、美貌にも関係無く?教壇に立って後輩の指導を続けている人。地域にあってボランティア活動や色々あるサークルで趣味と青春を謳歌している人。未だに重要なポストに就いてニラミを利かしている強の者。大勢の孫や曾孫に囲まれている人。いつの間にか施設のお世話になっている人。それぞれ一生懸命、毎日を過しております。そこで、本年秋、旧交を温めるべく久し振りの『附三会』を幹事　川合弘君、林（木村）久二子両君のもとで計画中です。同会諸兄、諸姉のご参加をお待ちしております。

（野入省吾）

■小昭27・中7期卒 ――

昨年五月二五日（略二年毎）同期会をホテルグランヴィア京都で開催しました。昭和二七年小学卒一五名、七期中学卒一四〇名、その内二六名が既に鬼籍に入り、住所不明者が一五名で現在一一四名。京都市内三七名、府下を含め近畿四三名、首都圏二八名、その他六名と全国に広がって各地で現役で或いは悠々自適（？）の生活です。当日は各地から三七名が出席し旧交を温め、再会を約束しました。

（谷口光弘）

■小昭31年卒・中11期卒 ――

「過疎の街から」

私の住む街は京都市の西南部に四十年程以前に開発された「洛西ニュータウン」。過疎と言っても子供達が過疎なだけで、老人は十分過ぎる程に居住しています。

昭和の高度経済成長の波と共に生まれ、平成の閉幕と共に暮れなずむ街です。

「晴れて我々学年はこの一年で後期高齢者と言う有り難い称号を」

素直に老いを認めるか、いや少なくともその日まで美しく生きて行くか、それぞれの生き様が問われています。

「日に何回かは服を着替えよう」

これは女房殿からのアドバイス。ついつい面倒と、雑な服装等以ての外。この冬、町内のスーパーで、「日本昔話」さながらの「綿入れ」を着た独居のご婦人を見かけましたがこれがNGの最適例では。

「写真写してますか」

告別式で無理やり集合写真の一部を引き伸ばした顔を拝むのは……

年に何回かは写真を写します。二年に一度はプリントします。決して自己愛ではありません。写真には気を付けなければならない老いの影が出ているので、写真を見る事は大いに自らの老いを正す機会なのです。

後に続く後輩諸君、急に「後期高齢者」に為るのではありません。その日の為に日々気配りが要るのではありませんか。

（井家上峻）

■小昭32年卒・中12期卒 ――

平成二八年一一月に二年毎の同期会が開かれて以来、昨年は全体の集まりは無しで、今年にA組幹事により開かれる予定です。

近年は常に同じ顔ぶれが出席される傾向があり、はじめての方、久方振りの方も憶せず、是非ともご出席いただければ、と思います。

同期の海外居住者の一時帰国時や、同期生の習い事の発表会に招かれた後で、数人でのミニ同期会かプチ同期会をして旧交を温めました。

個々人の日常生活は様々でしょうが、メール等のやりとりによれ

ば、体力的には七二、三歳の歳相応に衰えを感じつつも、現役続行の方とか、地域でのボランティア活動、趣味の山歩き、ゴルフ・テニス等のスポーツ、ストレッチエクササイズ、風景撮影・日舞・絵画制作・音楽演奏等の趣味や、お孫さんの守りや送迎等で、日常が充実されている方がおられるようです。

（鶴木孝典・宮川督三）

■小昭33卒・中13期卒 ――

東西合同同期会

平成二九年一〇月二日東京有楽町「外国人記者クラブ」にて、東西合同の同期会を開催。

今迄、京都での開催にはいつも関東からの参加が多数ありましたが、関東での開催には関西からの参加者が少なかったので、今回は関西でも積極的に呼びかけたところ、猿橋（中西）美也子先生をはじめ九名が参加、関東からの二三名を合わせて三二名が集まりました。会場は木村紀君の尽力で、普段は入ることの出来ない「外国人記者クラブ」を借りることができました。猿橋先生のご挨拶と乾杯のご発声で始まり、村上亨君の居合抜きの演武もあり、卒業以来、初めてお会いする方々もおられ大変懐かしく和やかで楽しい時間が過ごせました。

次回は、今年の一〇月一八日（木）午後二時から京都ホテルオークラにて開催が決定しています。多数のご参加をお待ちしています。

（今川真弥）

■小昭34年卒・中14期卒 ――

『東櫻同窓会二〇一七同窓生のつどい』には同期生五名が参加した。宴が始まって間もなくのこと。「こちらは、二一年生まれの方々ですか」（ええっ、誰かしら？）「藤本京子の娘です」（皆、一瞬で理解）。井上真理子さんのお母さまは毎回、我々同期クラス会のまとめ役でした。しかし癌で早逝されました。写真は、思わぬ、そしてうれしい交流の合間のワンショット（右から二人目は一年先輩の大村さん）。この集いにご参加の恩師は花坂雅夫先生（小学校の担任、理科）と山川信晃先生（中学校の担任、英語）。五五年以上前の思い出に花を咲かせました。

宣伝を一つ：同期生が女声コーラス『アンサンブル東櫻』を結成して一四年。桑山博さん指導・指揮でコンサート活動を続けています。二〇一八年一二月二日には『第四回クリスマスファミリーコンサート』をウェスティン都ホテル京都で開催予定。お出かけいただけると、うれしいです。詳しいことは竹村正子さん（06-6725-7700）へ。

（諏訪　浩）

■小昭39年卒・中19期卒 ――

平成二九年六月一一日（日）に東京のホテルグランドアーク半蔵門で久しぶりの同窓会が開催されました。六五歳記念附属同期会首都圏版二一名の参加、楽しいひとときを過ごすことができました。幹事の松田くんに感謝。出席できなかった方々も次回をお楽しみに？

（桝井敬弘）

■小昭41年卒・中21期卒 ――

二〇一七年一一月二六日（日）午後京都平安ホテルにおいて、久々の同期会（中学二一期）が開催されました。

当日は、恩師清水弘先生、千歳京造先生、西誠次先生、藤田久男先生をお迎えしまして同期五〇名の参加により盛大に開催されました。

第一部として同期の高橋裕ご夫妻によるミニコンサートが行われ、第二部として懇親会が行われ

まして懐かしいお話や、気持ちは附属中時代の紳士淑女の会話は大いに盛り上がりました。

開催にあたり北尾和弘さん、松本玲子（旧姓翠川）さんを始め多くの皆さんによるご尽力を戴きましたことに感謝し散会いたしました。

（小笹純嗣）

■小昭55年卒・中35期卒 ―

「半世紀＝繁盛期だよ、全員集合！！」と名を打ち五年ぶりの同窓会を高橋要先生、森先生ご夫妻をお招きし大将軍にて開催いたしました。

中学校卒業以来再会する友もあり、古き良き時代の仲間との楽しい時間を過ごすことができました。全員でのプレゼント交換、忘れる人がいなかった事！流石！！と感激！！

次回五年後も元気に再会出来ますように。

幹事さんよろしくお願いいたします。

（筑摩　寿）

第４回３５期附属京都中学同窓会　平成29年11月11日　於　大将軍

■小昭57年卒・中37期卒 ―

本年一月三日に、錦高倉の『ダニエルズソーレ』で一年ぶりに集まりました。近年はラインで五〇人程度のグループを作って連絡を取り合い、頻繁に集まっています。写真はないですが、東京在住メンバーとも品川で待ち合わせ、七人が集合しました。五〇歳になる来年は、小旅行を計画することになり、ますます盛り上がっています。

（谷垣　賢）

■小平成2年卒・中45期卒 ―

最近はFacebookなどSNSが発達し、人と会わなくても人がどんな日々を送っているかわかりますし、簡単にコミュニケーションをとれてしまいます。

ただそんなツールを使っても、実際に会ってくだらない話をするほうが何倍も楽しいなんてこともあるわけで、我々の学年では誰と

なく始めた忘年会を毎年開催しています。京中・桃中合同で年末に集まり、昔の話、今の話、将来の話で盛り上がり、でも気持ちは中高生当時になって、ひょっとしたら一年で一番楽しい時間かもしれません。

最近はマンネリなんて意見も出ているのですが、マンネリ感が出るほど会うことができるのは、結束の強さでもあると思います。

これを読んで「え?そんなんやってんの?」と思った方、つながりのある同級生に声をかけていただければ、誰かしら知っていると思いますので、ぜひ。今年もやるよ!(多分…)

(本田紘平)

■小平成3年卒・中46期卒 ―

今回とうとう幹事学年が回ってくる年になりました。同級生とはすっかりご無沙汰ではあったのですが、年賀状でのお付き合いがあった人やSNSを通してつながった人と連絡を取り合い集まってくれたメンバー一〇名で二月二五日に京都・四条で土曜日にランチ会を開催しました。小学校を卒業して二七年、中学校を卒業して二四年、不惑の四〇歳を迎えた今年、集まったメンバーは皆女性で、子育てに忙しい人、仕事をバリバリしている人、自分で事業をしている人などそれぞれの道にまい進している様子を知ることができてとても嬉しかったです。二次会は、祇園にあるこれまた同級生が経営しているバーで昼間からお洒落にカクテルをいただきました♪

あまりにも楽しくて写真は撮り忘れましたが、みなさん卒業アルバムのお顔と変わらず生き生きとされていました。

これを読んでいる同学年の方々、二〇二〇年の同窓会開催、東櫻だよりの発行、その他お手伝いしてもいいよという方はぜひともご連絡ください!

(森野桂子)

■小平成9年卒・中52期卒 ―

みなさんお元気ですか?卒業して早?年、もうパっと計算できない時間が経っておりますが……子育て真っ盛り、仕事に全力投球、海外で活躍中、など公私共々あの頃からは全く想像できない日々を送られているかと思います。

さて、昨年のお盆休みに、声をかけてもらい高校の同級生も含めた同窓会へ参加しました。近況報告もそこそこに、話題に上がったのがあの独特の学校行事。鴨川の北から南を走破する「能力遠足」、長野の山々を制覇した「林間学校」、遠泳で?㎞泳ぐ「臨海学舎」、いずれも、みっちり事前練習付きの体力、精神力共に鍛えられ行事ばかり……当時は「もう止めたい!」気持ちでいっぱいでしたが、今となっては、「練習でこんな事があった」、「〇〇先生に怒られた」と絶好のお酒の肴となる、いい思い出になっていました。今となっては、どれも笑い話になる思い出ばかり。また思い出持ち寄って同窓会しましょう!

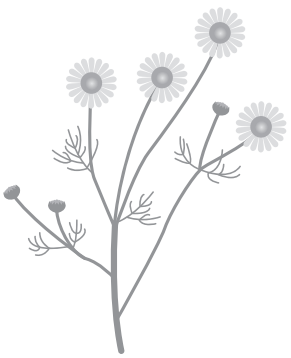
(久保田(松田)朋子)

■小平成26年卒・中69期卒 ―

高校生となり早一年。九〇人それぞれが新たな環境で一歩踏み出した一年。その歩幅はみんな違うけれど、どの一歩もきっと九〇人、一人一人の一生懸命がたくさん詰まっていると思います。思い通りにいかないこと、何かに追われる忙しい毎日にため息が出ることもあります。けれど行事や新しい友だちと過ごす楽しい時間だっていっぱいあります。高校に進学したからこそ在学中には気付けなかった京都小中の良いところ、離れてより一層強く感じる六九期のチームワーク、九年間で経験させて貰った行事の数々が今の私たちの大きな推進力であり、支えとなってくれていると思います。

勉強に部活に遊びに。今が一番楽しい時だよ。そんな風に言われることがあります。六九期のみんな、楽しんでいますか?なかなか会えない人もいるけれど会えた時には、いろんな話を聞かせて下さい。

(笹野瑠理)



京都教育大学附属京都小中学校
東櫻同窓会　会計報告

自　平成26年4月　1日
至　平成29年3月31日

（金額単位円）

【収入の部】

会費収入	3,450,000
寄付金収入	1,720,000
総会会費収入	2,324,000
受取利息	4,256
前期繰越金	11,406,749
合計	18,905,005

【支出の部】

前回（H26.6.28）総会経費	2,734,872
東櫻だより作成費	3,167,272
タイ国交流寄贈費	400,000
ホームページ運営費	321,000
卒業記念品	122,861
通信郵送費	145,805
事務用雑費	107,635
東部東櫻同窓会補助	300,000
次期繰越金	11,605,560
合計	18,905,005

会計担当　北村光一郎（小昭 50 年卒・中 30 期卒）

上記会計処理は適正に行われていることを認めます。

平成29年6月20日

京都教育大学附属京都小中学校東櫻同窓会

監事　宮川督三

監事　絹川雅則

同窓会への寄付のお願い

常任理事会理事長　中西　秀彦

平素は当同窓会へのご協力まことにありがとうございます。

同窓会会費につきましては、小中同窓会の統合後、入学時の終身会費制度に移行いたしました。しかし、今後、学校の生徒定員減があると伺っており、この終身会費だけでは同窓会の活動がまかなえない事態となることが予想されます。

また、同窓会に納めていただいた終身会費からのみ支出するというのは本末転倒にも思えます。

そこで同窓会の会員の皆様におかれましては、同窓会への寄付をお願いいたしたく存じます。前小学校東櫻同窓会の会費が三〇〇〇円でしたので、一口三〇〇〇円といたしますが、何口でも結構ですので、ご寄付いただけましたら幸いです。

寄付については、同封の振替用紙をご使用いただくか、インターネットバンキングで

ゆうちょ銀行　当座　一〇九店　0015200

宛お振込みくださいますようお願い致します。

皆様のご理解とご協力をこの場をお借りして、心よりお願い申し上げます。

名簿委員からのお願い

ご住所の変更、送付の停止等がありましたら、東櫻同窓会ホームページまたは同窓会事務局までご連絡ください。

同窓会ホームページ

https://www.touou-dousoukai.jp/info.php

同窓会事務局

〒603-8163　京都市北区小山南大野町1番地

TEL (075) 431-7131

つどい受付風景

東櫻同窓会　実行委員会より

奥村　晋

東櫻同窓会の実行委員会は三年に一度の「東櫻同窓生のつどい」を機に、四十歳になる学年から三学年で構成され、昨年より小学校平成二年から四年卒、中学校四五期から四七期卒（昭和五二年度生まれから五四年度生まれ）のメンバーで運営しております。

実行委員の最初の大きな仕事は今号「東櫻だより」の発刊となり、右も左もわからない段階からのスタートでしたが、同窓会の理事の皆様、また前実行委員会の皆様の助けを頂戴し無事発刊できたこと嬉しく思っております。

今後は二年後の「東櫻だより」の発刊作業、なにより二〇二〇年の「東櫻同窓生のつどい」の運営という重要な役目があります。無事に成功するよう同窓生の皆様には更なるお力添えをいただけますようよろしくお願い致します。

次号の「東櫻だより」でも引き続き紙面を盛り上げてくださる同窓生の情報やお写真などもお待ちしております。

また実行委員会はまだまだ少ないメンバーでやっておりますので、昭和五二年度生まれから五四年度生まれの同窓生の皆さん、お仕事、子育て等でお忙しい年代かと思いますが、気軽にできる範囲で結構ですのでお手伝いいただけると助かります。一緒に東櫻同窓会を盛り上げましょう！

新旧ランリュック

編集後記

初めての編集作業に右往左往しながら、経験者のお知恵を借り、幹事三学年で力を合わせ、どうにか今回の発行にこぎつけることができました。

不慣れな担当者を支えていただいた方々に感謝するとともに、こうした機会がなければお会いすることも、係わることもなかったであろう人々との出会いを大切にすることが、自分自身の今後の財産になるとの思いで今回務めさせていただきました。

今までは、住所変更もかけておらず実家に届いて放置されていた東櫻だよりを、自分自身が忘れた頃に取りに行き、内容に関しても流し読みで済ませていたことがほとんどでした。

しかし、今回編集委員長を務めさせていただいたことで、皆様からお寄せいただきました原稿を隅々まで熟読し、各期生における附属卒業生の絆の強さを目の当たりにしています。

年を取ってもなお、年を取ったからこそより強くなっていく良好な関係性が各期生からのたよりにあふれていました。

私たちの期生においても、十年後、二十年後を見据えた末永い良好な関係づくりの第一歩になっていくことを今後の目標としていきたいと改めて強く感じました。

次号発行の際は、改めて皆様のご協力をお願いいたしますのでどうぞよろしくお願い致します。

（編集委員長）

渡り廊下

同窓生のつどい

会場全景

堀場同窓会会長ご挨拶

鏡開き

ハタヤテツヤさんのピアノ演奏

恒例の福引